

義父、井上靖のこと

山形商工会議所副会頭
井上弓子



私が、作家井上靖家の一員となったのは昭和47(1972)年のことでした。いきさつは、思いもかけぬものでした。前の年のクリスマスの夜、山形に帰っていた私に一本の電話がありました。学生時代にお世話になったシスターからで「井上先生のご次男卓也さんに会ってみては」というものです。年が明けて上京、世田谷の井上宅で家族全員の“面接”を受けました。お眼鏡にかなったのでしょうか？その年結婚しました。

井上家は本当に賑やかな家庭でした。毎年元旦に開く新年会には出版社、新聞社の担当記者、小説「氷壁」が縁でできた山登りのメンバー、文壇のお仲間、クラブのママさんと、まさに千客万来で応接間が足の踏み場もない賑わい。小澤征爾さんが酔客を一本の手振り合で合唱団にまとめあげたこともありました。

しかし、義父はいったん仕事に入るや…。元気

な時はもちろんですが、がんを患い築地の国立がんセンターに入院した時もそうでした。病室のベッドの横に机を持ち込み、遺作となる「孔子」を執筆していました。中国を旅し、10年間掛けて資料を読み込み、満を持して万年筆を動かす。放射線治療を受けながら連載を書き上げました。「柵目を埋める仕事で楽しませてもらっている。こんなありがたいことはない」と述懐していました。

そういえば義父は42歳と遅い作家デビューでしたが、毎日新聞学芸部記者として多くの作家、芸術家に接することができ、いよいよ作家として筆一本で生きようと決断した時には「行李(こうり)いっぱいになるほど書くことがあった」「これから勝負、来る仕事は拒まずだったよ」と、折にふれ私に話してくれました。

私が社員の方々の懇請を受けて山形に帰り、会社を継いだのは15年ほど前になります。私は、高校生の時に父と弟を相次いで亡くし、母が頑張って会社を守ってくれていたのです。主人が、「君ならできる、しっかりやりなさい」と励まし、背中を後押ししてくれました。

義父が83歳で亡くなったのは平成3(1991)年1月29日。終生書き続けた最期の作品は詩作「病床日誌」でした。義父らしいユーモアと孔子の遺した「天命」の境地が感じ取られます。紹介します。

『隣室に、肉親の者、何人か集って、病床にある私を話題にして、緊急会議を開いている。どうやら、この2、3日、多少の痛みを持ち始めた私の尾髄骨を、このふしぎな機関を、いかにすべきか、その打合せらしい。神さまが、どこかで、耳をすませている。神さま自身、どうしたらいいか、見当がつかないのだ。』

○

一日端坐して、顔を庭に向けている。樹木も、空も、雲も、風も、鳥も、みな生きている。陽の光りも、遠くの自動車の音も、みな生きている。生きているのは森羅万象の中、書斎の一隅に坐って、私も亦、生きている。』

(写真は文化勲章受章を祝い家族で記念撮影、前列左端が井上弓子氏、中央が井上靖氏とふみ夫人)

高島電機(株) 代表取締役会長